

# 『平安があるように』(ヨハネの福音書 20 章 19-23 節) 2020.4.12.

<はじめに> イースターの朝を迎えました。一堂に会して主を礼拝できない中にはありますが、一人ひとりとともにおられる復活の主を目を上げ、それぞれがおられる場所で礼拝をささげ、主に会いし、主からの語り掛けを受け、主とともに日々生きて参りましょう。

## I イエスは来られる(19)

### ①閉じ籠る弟子たち

主イエスの十字架処刑を目の当たりにした弟子たちは、すぐにエルサレムを離れませんでした。茫然自失の混乱の中で動けなかったでしょうか。主を十字架につけたユダヤ人の手を恐れて、動くこともままならなかったのかもしれない。

### ②弟子たちが恐れていたもの

主イエスを殺された喪失感とともに、その主を捨てて逃げた後悔は重く自分を責めます。自分たちを取り囲む敵に怯え、これからどうなるのか、どうすればいいのか分からない不安が、彼らを支配していました。私たちの今と似てはいませんか。

### ③鍵をかけた部屋

せめて自分の身の回りの安心を得ようと鍵をかけます。誰も入ってこないように、この中だけは守られ、自分でいられる半径2mの王国です。しかし、鍵は自分も狭い世界に閉じ込めます。いつまでそうしていられるのでしょうか。

## II イエスが現れる(19-20)

### ①イエスが来られる(19)

鍵のかかった部屋に突然主が現れ、彼らの真ん中に来られました。死なれて墓に納められた主、もう二度と会えないと思っていた主が目の前に現れたのです。鍵が閉まっていますが、主には障壁となりません。「神は私たちとともにおられる」事実は今も変わりません。

### ②イエスが語られる(20)

「平安があなたがたにあるように」一懐かしい声の響きが彼らの心の緊張を溶かしたことでしょう。不安と恐れに取り囲まれ、固くなった彼らに必要なのは、平安・安心です。環境・状況、物事の有無や成り行きに依らない、生ける主の御声を聞く者に与えられるものです。

### ③イエスが示される(20)

主は弟子たちに手と脇腹を示されました。あの十字架で受けられた傷は主のいのちを奪いましたが、今主は生きて目の前に立っておられます。主は再びいのちを得られ、死から甦られました(ヨハネ 10:17-18)。これが理論や定説を越えた安堵と喜びをもたらします。

## III 2度目の語り掛け(21-23)

### ①1度目の平安

主が繰り返されるときは大切なことです。1度目の語り掛けは、主が死から甦られた事実を彼らに示すことで、悲しみ・不安・恐れを吹き払い、主の臨在と平安に包まれるためです。主が私とともにおられる実感を、私たちは何によって得ているのでしょうか。

### ②2度目の平安(21)

2度目には付け加えられたことがあります。主は弟子たちを以前と同じように遣わすと言われます。主を捨てて逃げた弟子を咎めることなく、ご自分の弟子とされました。この言葉が彼らの罪責感・自責の念を拭い、どれほど安堵したかは、想像に難くありません。

### ③聖霊を受けなさい(22-23)

さらに、主は彼らに息を吹きかけて「聖霊を受けなさい」と言われました。十字架の前夜、最後の晩餐で語られたもう一人の助け主です。この助け主とともに、遣わされる任務は、罪の赦しの福音を伝え、赦された者に与えられる平安を満ち渡らせるためです。

<おわりに> どのような状況下でも、主は来られ、ご自分が生きて働かれていることを私たちが見られますように。また、罪赦され、主の弟子たる平安と喜びを感じられますように。そして、私たちも、罪が赦されることで得られる平安を助け主なる聖霊とともに伝えられますように。(H.M.)